

安城城跡・安城歴史博物館を訪ねて … 安城合戦の場 家臣が育ち、徳川の基礎ができた

安城(安祥)城跡 山門 (大乘寺) 本堂

安城歴史博物館



安城城跡は、今は安祥城址公園として整備されていて、歴史博物館も併設されている。本勉強会の日には特別展「三河本多一族」が開催されていた。



○築城は、畠山氏の一族と言われる和田氏と伝わるが、築城年も含め定かではない。

○もとは安城城と呼ばれていたが、江戸時代に「安祥城(あんじょうじょう)」と表記するようになった。

○台地上に位置し、台地の南・東・西側は湿田。

○1471年(文明3)、松平宗家3代目岩津城の松平信光が謀略を用いて無血

入城したと言われる。以後は安城松平家4代の居城となる。

○初代・松平親忠(信光の四男)が信光より城を譲り受ける。二代・長忠、三代・信忠、四代・清康と続

くが、二代・長忠の時に安城松平家が一族の総領家としての地位を固めた。四代の清康（家康の祖父）が岡崎城に本拠を移す（1524年頃）までの約50年間、安城城は松平家の拠点となった。

○清康が殺害されると、清康の叔父で織田氏と関係の深い松平信定（桜井松平）が実権を握り、清康の子広忠は岡崎を追われたが、今川を頼って岡崎城主に復帰した。

○松平の弱体化により、1540年（天文9）、織田信秀に安城城を攻めとられた後、城を巡って織田と松平・今川連合軍の数度の攻防（安城城争奪戦）が繰り返された。

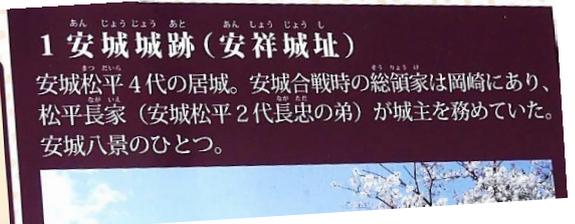
○1549年（天文18）に広忠が若くして死去すると、すかさず今川が動き、大軍で安城城を攻め落とす。城代であった織田信広（信長の兄）を生け捕りにし、当時織田の人質であった家康と人質交換をする。

○1560年（永禄3）、桶狭間の戦いの敗戦によって今川が西三河から撤退すると、信長と家康の「清洲同盟」が結ばれる。これにより、安城城は廃城になる。

○江戸時代には畑となっていたが、1792年（寛政4）年、安祥城の鬼門除けとして1489年（延徳元）に城の北西に建立した了雲院が本丸跡に移転。安祥山大乗寺となった。

安城ふるさとガイド さんによる 安城城 史跡巡り

博物館から右回り組



- ◆この看板の後が本丸、前が三の丸です。
- ◆北西から伸びる台地の先端にあって、まわりを森とぬかるんだ田（低湿地帯）に囲まれていましたが、更にその内側に堀や土塁で、台地にある曲輪（本丸・二の丸など）の守りを固めていたのです。

七つ井 7つのうちのひとつ風呂井



本多忠高墓碑



墓碑の土台部分が歩道にはみ出している。



本多忠高の墓碑は、堀の内側にある。文化財なので切り取るわけにはいかない。

◆むかし、安城村一帯は海に近く、井戸を掘っても良い水に恵まれなかったのですが、この地域の丘陵地に良い水が出るとわかりいくつかの井戸が掘られ、その中でもきれいな水が出る井戸が「七つ井」と呼ばれていました。

七つ井 = 筒井、浅黄井(あさぎい)、風呂井、中井、桜井、柳井(やなぎい)、梅井

- ◆今では、どの井戸も水は出ません。（昭和30年頃まではコンコンと湧き出していた）
- ◆「筒井」の水は本当においしく、茶道にも使われていたと言います。1949年、今川・織田で人質交換が行なわれ、竹千代（家康）が岡崎に帰る途中、安城城に立ち寄り、この水を飲んで“本当にうまい。ぜひ持って帰りたい”と竹筒に入れて持ち帰ったと言います。筒井名の由来。



本多忠高墓碑は大亀が背負う — 忠豊も同じ



◆墓石を支えるいさましい大亀は、徳川に功績のあったものだけに許されるものです。許可なく使うことはできません。

「安城合戦」始まる

- ◆まだ家康が生まれる前の1540年（天文9）、広忠は岡崎にいて、安城城は松平長家（松平親忠の四男）が守っていましたが、織田信秀に攻められ安城城において討死しました。織田に奪い取られたのです（第一次安城合戦）以後10年間、安城城は織田の城になりました。
- ◆1545年（天文14）、広忠は美濃に侵攻した織田勢の敗報を、安城城奪還のチャンスと捉え出陣する。しかし、織田に対して歯が立たなかった。広忠は退路を絶たれ討死を決意するが、重臣の本多忠豊（本多忠勝の祖父）がそれを諫め、広忠の身代わりとなって敵本陣深く突撃した事で織田勢の注意を引く事に成功し、広忠や生き残った松平勢は岡崎城へと退却することができた。身代わりとなった本多忠豊はこの地で討死し、その場所（安城町赤塚 城の北東500m程）に墓碑。
- ◆1549年（天文18）、広忠が没し、今川・松平軍は安城城を攻撃しました。先鋒となった本多忠高（忠勝の父）は、安城城代 織田信広に追い迫りましたが、本丸近くまで深入りし敵の矢に当たり討死しました。
- ◆忠豊、忠高の墓碑は、完成年間に岡崎藩主 本多忠頭によって建てられました。「墓」は2人とも江戸時代に改葬され、岡崎の妙源寺にあります。

大乘寺

境内に入る 本丸跡



ガイドさんから説明

山門付近から見下ろした、湿地帯だったと思われる区域



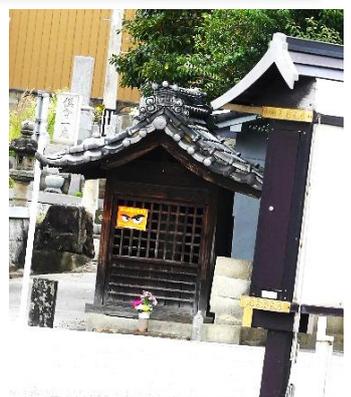
↓ 東から見る



隅櫓跡



筒井



安城城縄張り図



- 曲輪A（本丸）を中心に複数の曲輪が配され、周囲を堀と土塁が囲む。
- 特に曲輪B（二の丸？）との間の堀は内部が複数に区画される障子堀となっていた
- Aの北東にはC、D、Eの3つの曲輪が組み合わせられ、北から容易にAへ進入できない工夫がなされている。
- Aの南端とCの東端には、それぞれ櫓が設けられていた。
- 曲輪F（三の丸）

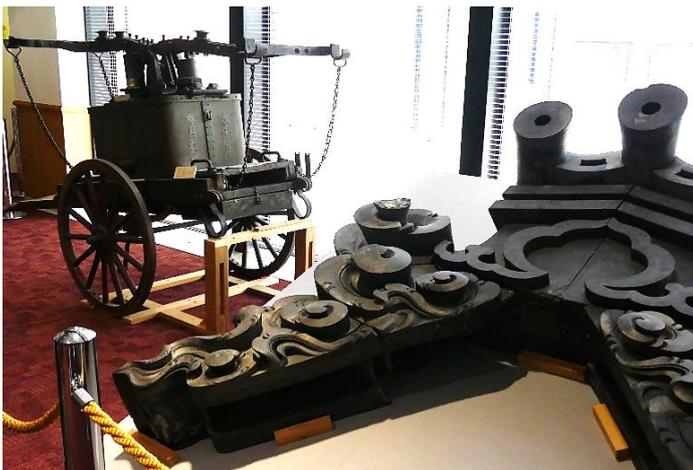


ありがとうございました！

安城歴史博物館

常設館の展示から

スタート



堀内貝塚遺跡



安城市堀内町で昭和2年に発見された貝塚。

平成7～8年の調査では貝塚の北西部に当時の墓場が確認され、良好な形で埋葬人骨も発掘された。

堀内貝塚から出土した
縄文時代の20代の女性の人骨

土壙墓
(どこうぼ)



2歳6カ月相当の乳幼児

土器棺墓

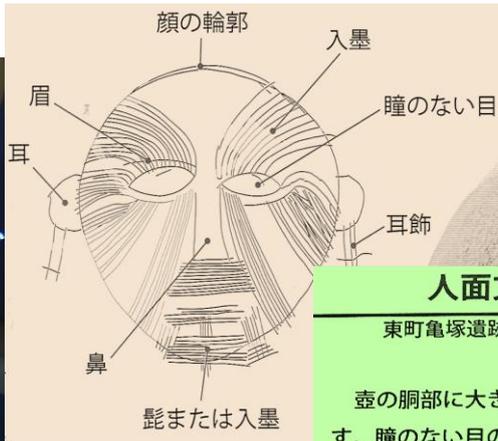


土壙墓 = 土を掘って棺を使用せずに遺体を埋める墓。この骨は、膝を曲げた状態で埋葬されていた(屈葬)。

土器棺墓 = 遺体を土器に納めて埋葬した墓。この墓の土器は、日常使用している深鉢を転用していた。

人面文壺形土器

国の重要文化財



弥生時代後期の壺型土器。祭祀で使用された土器と考えられている。

人面文壺形土器

東町亀塚遺跡出土/弥生時代終末期
本館蔵

壺の胴部に大きく人面文が描かれています。瞳のない目の周囲にイレズミを表現していると考えられる線が描かれています。顔は卵形で、耳には耳飾りと考えられる線刻もみられます。中国の歴史書「魏志倭人伝」の倭人の男子は「黥面文身(けいめんぶんしん)」していたという記述を彷彿とさせます。

顔の表現が非常に精緻で全体がよくわかることから、弥生時代の習俗をあらわす第一級の資料とされています。

九州・瀬戸内地方で成立し、弥生時代終末期から古墳時代にかけて東海地方で多く見られ、古墳時代前期には東日本に伝わった。全国で30遺跡近く40例以上確認。

鹿乗川流域遺跡群

安城の弥生遺跡

弥生時代の集落は鹿乗川流域の沖積低地に営まれました。特に現在の古井町から寺領町にかけては遺跡が密集しており、鹿乗川流域遺跡群と呼ばれています。前期では中狭間遺跡(桜井町)や惣作遺跡(寺領町)などで小規模な集落が見つっていますが、中期には次第に規模が拡大し、後期には本神遺跡(古井町)、彼岸田遺跡・中狭間遺跡(桜井町)、下懸遺跡(小川町)、惣作遺跡(寺領町)などを中心とした西三河を代表する大集落に発展していきます。

数多く出土しており、西三河における交流の拠点になっていた。
○人面文土器をはじめとする線刻土器が多数出土している。

鹿乗川流域は、モノが集まってくるような地域であったようである。

鹿乗川流域遺跡群は、岡崎市島坂町から安城市寺領町にかけての鹿乗川・西鹿乗川流域に所在する遺跡群の総称。

- 弥生時代から平安時代まで、一部空白の時代はあるものの多くの時期で、遺構や異物が見つかっており、集落が長く継続している。
- 大量の土器が出土している。
- 弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、外来系土器(他地域の形をした土器)が





松平信光には48人の子がいたという。松平当主は、新たに得た領地に息子達を置き、支配を固めていった。それぞれ、〇〇松平と言われる。

松平清康像(複製) 岡崎市隋念寺所蔵

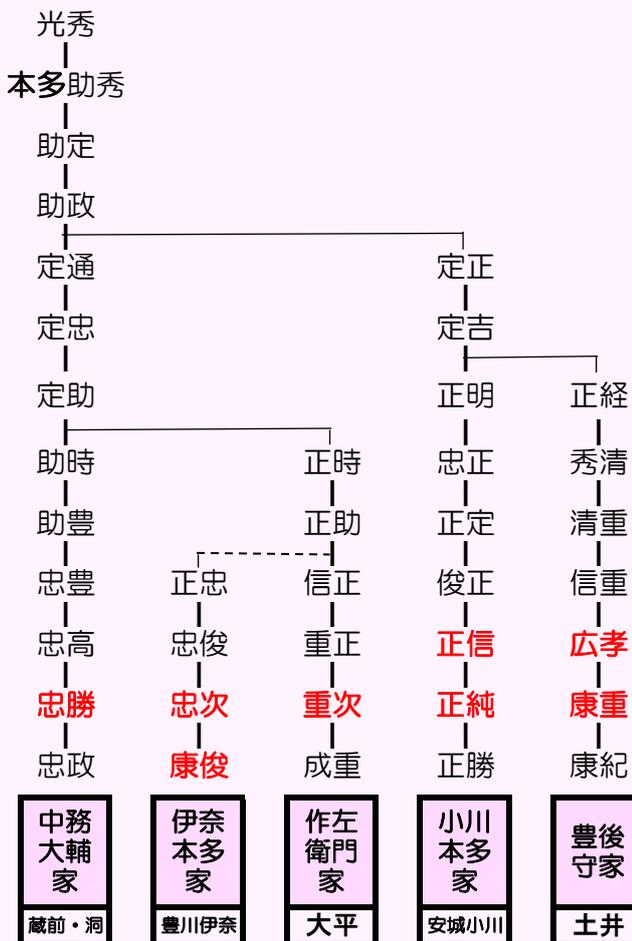


隋念寺は、1562年(永禄5)に徳川家康が祖父清康と清康の妹於久の菩提を弔うために創建された寺。その時、この画像が奉納された。於久(久姫)は家康の大叔母で、育ての親でもあるが、赤渋の松林寺は、家康から久姫の永代念仏供養を託されており「お位牌」がある。

特別展 三河本多一族 より

藤原兼通 (平安時代中期)

本多一族の略系図



特別展の展示について

本多氏は安城譜代として、代々安城松平家に仕え、一族から多くの譜代大名や旗本家を出しました。『寛政重修諸家譜』などの系譜類によると、本多氏は豊後国本多(大分県)の助秀からはじまり、のちに尾張、三河と移ってきたと伝えられています。(安城譜代とは、古くから松平に仕えた氏族をさす)

本多氏はさまざまな系統に分かれています。今回の特別展ではそのうち五家を取り上げます。徳川四天王の一人である本多忠勝の一族(中務大輔家)、小川(安城市小川町)で出生したとも伝えられる本多正信の一族はもとより、特に本展では鬼作左と称された本多重次の作左衛門家、家康から田原城を与えられた豊後守家、さらに三河国伊奈を本拠地とした伊奈本多家について焦点を当てて紹介しています。

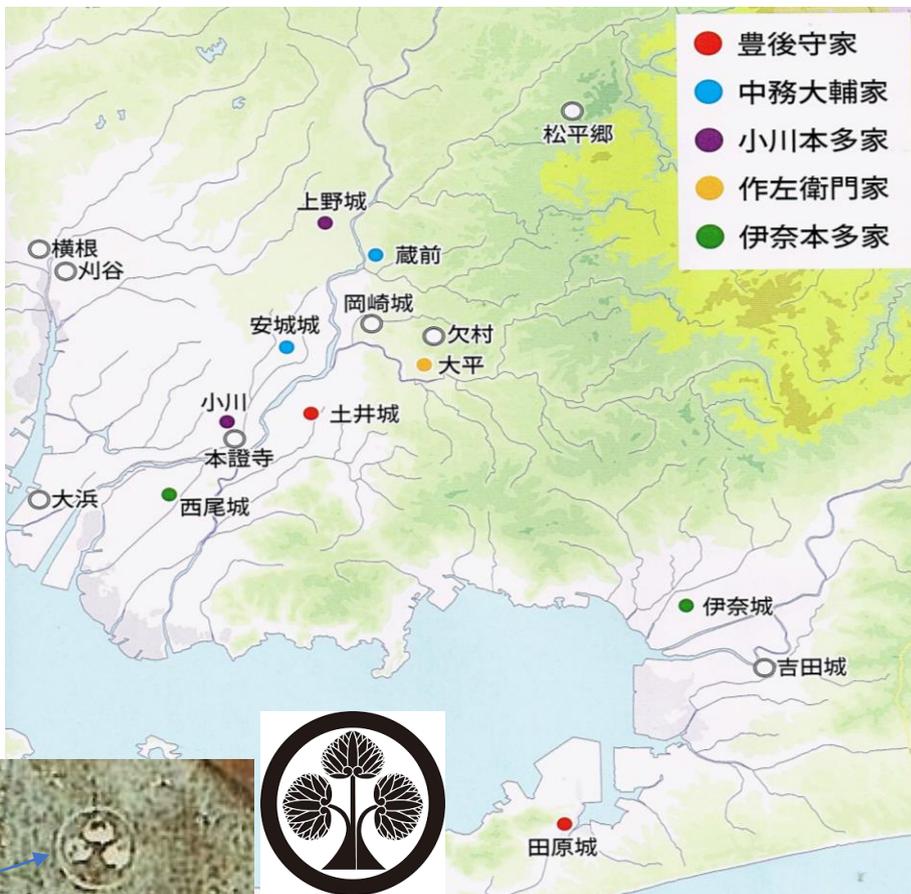
赤字=家康のもとで活躍した。

本多五家

○本多家が三河に来住し、一族を分出していったのは十五世紀後半頃と思われる。

○〔前ページの(「寛永譜」「寛政譜」による)系図では繋がっているが〕伊奈本多家のみは山城国(京都)から伊奈に来住されたとされ、他四家とは出自が異なると考えられる。

○四家の中で、家康が松平当主になる前に有力であった豊後守家が一族の主筋だったと推定されている。



本多氏葵紋の伝説

○松平清康の田原攻めの際、伊奈城主本多正忠は清康を伊奈城に迎え勝利の祝宴を開いた。この時、水葵の葉に肴を盛り差し出した。これを見た清康は、正忠が先陣をきり戦いに勝利したことを吉例とし、伊奈本多家の家紋である三つ葵(立葵)を自らの家の家紋にしたという。

(後に「徳川・三葉葵の家紋」となったと伝えられている)

それが、隋念時の清康像の肩衣にある立葵紋だとも言われる

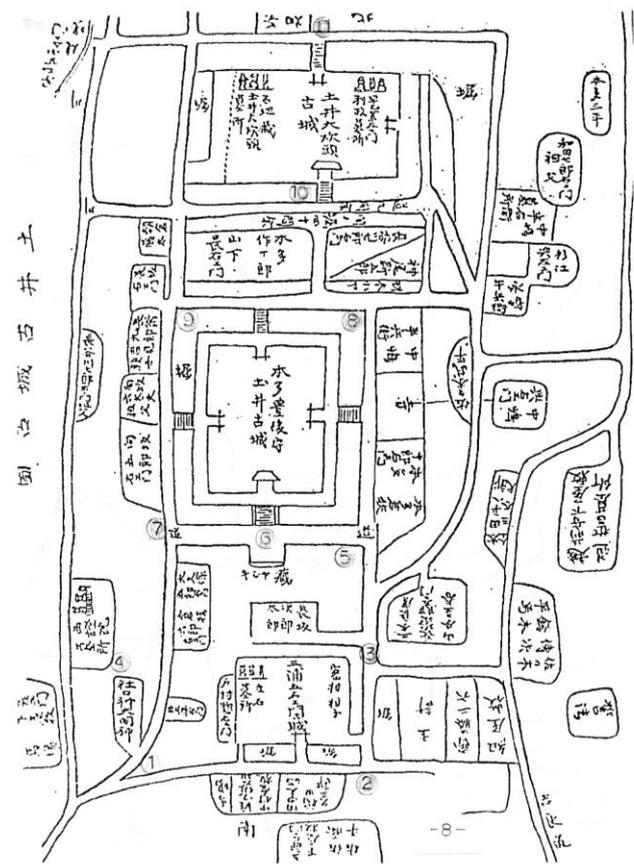


本多立葵 左離れ

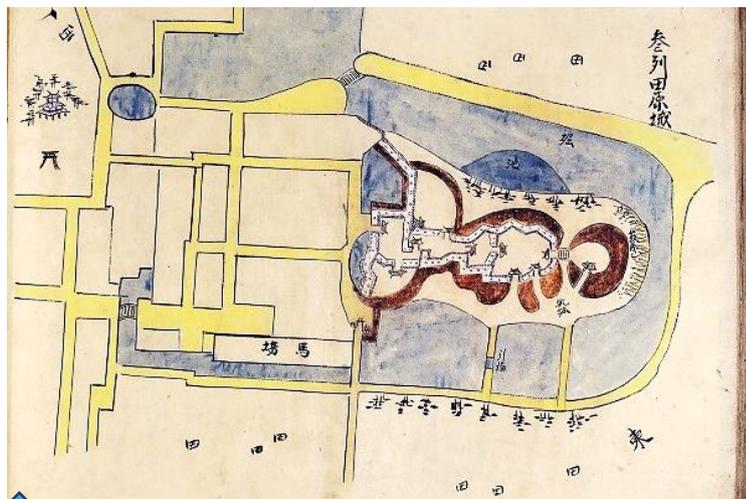
豊後守家…松平家と関係をもったのは秀清の代で、松平長忠に従ったとされ、この時に長忠から土井郷(岡崎市)を拝領したと伝えられる。(しかし、すでに以前から豊後守家が同地の領地権を持っており、その所領を安堵された、ということであろう)

康重は関ヶ原の戦いの後、三河岡崎藩(5万石)初代藩主となる。本多豊後守家の大名としての初代。

土井城



三河田原城



↑1564年(永禄7)、家康から命を受けた広孝は田原城を攻め落とした。その功績により、田原城とその近辺の地を家康より賜った。三河統一時に城主あるいは城代に任命された人物は、酒井忠次(吉田城)・酒井政家(西尾城)と本多広孝の3名である。

←土井城は、館が南北に3カ所あり、郷内の屋敷地を表している。北の館は土井氏の旧居城(古城)とあり、中央は本多作十郎屋敷、南が豊後守家の城館。それぞれ方形で、周囲または一部に堀がある。この地は、矢作川の自然堤防城にできた集落。

作左衛門家…重次は幼名を八蔵と名乗り、松平清康に7歳の頃より仕えた。その後、家康の初陣の寺部の戦いに加わり、首2級の戦功を挙げた。弟の九蔵（重玄）はこの戦いで討死している。作左（重次）は以後、家康の領地拡大戦のほとんどに加わって戦功を挙げた。三河一向一揆では浄土真宗から改宗して一揆方と戦った。1575年（天正3）の長篠の戦いでは、7カ所の疵を受け、右目を失った。武刃者の印象の強い重次だが、実際には内政面でも活躍したことが史料からもうかがえる。

小川本多家…正信は三河一向一揆で一揆方につき、家康の許を去った。本能寺の変以前には帰参し、石川数正が出奔したあとは家康の側近となり知略をもって仕えた。家康の関東移封後は秀忠の側近となり、関東の内政や江戸城や城下町作りの主導的立場となった。優れた行政手腕で初期の江戸幕府を支えた。「三河物語」（大久保忠教 著）には昔話として、正信が以前から大久保家に生活の援助をされていたことや、正信不在中にも妻子は三河に残っており、その面倒を大久保家が見ていたことが書かれている。大久保家に対して、正信は恩を仇で返したことを語ったくだりである。正信は裕福な武家の出身ではなかったようである。

伊奈本多家…三河伊奈城主を代々務めていたのが伊奈本多家である（1590年に廃城するまで約150年間。忠俊-忠次-康俊まで）。家康が自立する（1961年）まで、今川氏に従っていた。康俊は酒井忠次の二男で、本多忠次の養子となった。家康の関東移封に伴い下総小篠（千葉県佐倉市）に5000石の領地を与えられた。

中務大輔家…平八郎忠勝は徳川四天王の一人。忠勝の祖父忠豊は松平清康・広忠、父忠高は広忠に仕え、蔵前村（岡崎市）に居住していたとされる。また、洞村（岡崎市）にも屋敷があったと言われる。忠豊・忠高は松平広忠が安城城を奪回するための戦いにおいて戦死した。

本多忠勝生誕地の碑（岡崎市西蔵前町）



武での奉仕 — 家臣団の中で最も重要視された中務大輔家の忠勝、祖父忠豊・父忠高。豊後守家の広孝・康重、小川本多家の正重、伊奈本多家（吉田攻めで活躍）・康俊（関ヶ原の戦いで活躍） などなど。江戸時代、本多家と言えば武功の家と位置づけされた。

第二次高天神城（家康と武田氏の攻防の地・静岡県掛川市）の戦い…1581年のこの戦いで家康方はことごとく武田方を打ち取った。「信長公記」によると、安土には、およそ730の首級が届けられ、そのうち本多平八郎（忠勝）52級、本多作左衛門（重次）18級、本多彦次郎（康重）21級、本多庄左衛門（信俊）5級とされ、本多一族の戦闘における活躍が記されている。

政（まつりごと）での奉仕

小川本多家の正信が、政の奉仕で第一の家康家臣。奉行・側近として手腕を発揮した。子の正純は家康の側近として駿府で仕え、初期の幕政の中樞を担った。

武と政 両方での奉仕

作左衛門家の重次は、合戦で多くの疵を受けた強者としての印象が強く、いくつもの逸話を残しているが、家康の5カ国領有期には内政に専念した。武の奉仕で活躍し、後年は有能な官吏となり政で奉仕した。

東海地方への移封

関ヶ原の戦いの後、譜代大名は関東から各地へ移封された。豊後守家の康重は三河岡崎へ。伊奈本多家の康俊も加増を得て三河西尾に二万石。その後出入りあり1651年に近江膳所七万石へ。中務大輔家の忠勝は、西国への押さえを期待され、伊勢桑名へ。忠勝の子忠政の時に播磨姫路へ。

関東移封以降の本多一族の所領（1580年から江戸時代初期）

- 中務大輔家 = 上総大多喜 → 伊勢桑名 → 播磨姫路
- 小川本多家 = 相模玉縄（正信）、下野下山（正純）
下総舟戸 → 上野沼田 → 駿河田中（正重系）
- 豊後守家 = 上野白井 → 三河岡崎 → 遠江横須賀 → 出羽村山 → 越後糸魚川 → 信濃飯山
- 作左衛門家 = 上総古井戸 → 下総井野 → 越前丸岡（成重系）、越前越中（富正系）
- 伊奈本多家 = 下総小篠 → 三河西尾 → 近江膳所 → 三河西尾 → 伊勢亀山 → 近江膳所

(記) 竹内 喜則